

肺検診の重要性 —COPDパート2—

国立病院機構和歌山病院
院長 南方良章

本シリーズは肺検診の重要性を精査し、肺病、COPDの3つの病気をとお話してお話してまいります。

今回は、3つ目の病気で

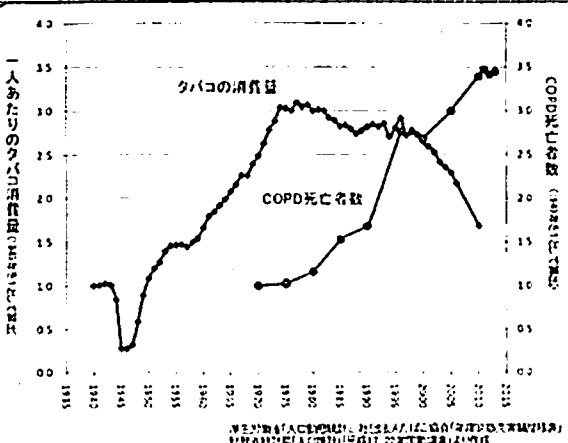
ある「COPD」について「パート2」です。前回は、あまり耳慣れないCOPDのお話をしました。COPDは、慢性閉塞性肺疾患で呼吸が困難になり日常生活が制限されてしまう病気のことでした。2020年までに世界的に死者が増えることが心配されている病気です。

アメリカと日本におけるタバコと肺の関係をお話します。1945年の第二次世界大戦が終わったあたりでアメリカでのタバコの消費は頭打ちとなっていました。終戦後にタバコを止める人が増えアメリカでは、タバコの消費量が減少したのです。グラフで示したように1945年の第二次世界大戦が終わったあたりから日本では、逆に増えています(1945年あたりは配給制により低下したとの見もあります)。実はタバコの消費量が平行して肺病の死亡率が約20年後に増加します。更にCOPDの死亡率が30年遅れて増加します。ですから今年タバコの消費量が減ったからといって直ぐに病気が減るのではなく、20年後以降に肺病、30年以降にCOPDが減ると考えなければなりません。アメリカでは現在で

吸ってきたという方であれば、「肺年齢が歳1なんと実年齢より20歳も若くいて肺はおじいさんですよ」という場合もあります。このように1秒量を測ることで肺年齢を計算することが出来るようになります。肺の健康度を身近に感じられるようになります。肺年齢によりCOPDを病気がたと感じていただけではと願っています。

肺の若返りについてお話します。肺も1年で1歳の年齢を重ねていきます。例えば、1秒量が100ccに変われば肺年齢は男性で3・6歳、女性の場合4・5歳分に相当しています。ここで、気管を広げるCOPDの治療薬を用いた場合は1秒量が上昇します。これを年齢で計算すると肺は、男性で5歳、女性で6歳ほど若返ったこととなります。咳、痰、呼吸困難の症状がある方は、積極的に検診を受けていただき早期に診断して治療することで肺年齢を若返らせ、日常生活を自由なく過ごしていただくことを考えます。

本シリーズの第1回に、2020年の世界の死亡率では1位から7位で事故を除く6つの中でCOPD、下部呼吸器感染(肺炎)、肺癌、結核など4つが呼吸器疾患であり、将来的に呼吸器の病気で死亡する確率が極めて高いことをお伝えしました。和歌山病院は呼吸器を専門とする医師が多数在籍しており、県内でも有数の診断力を持っていきます。呼吸器の病気を早期に発見する検診について紹介します。一つは肺病検診があり低線量胸部CTを用いて結核も調べます。また、タバコを多く吸っていらっしゃる方は、喀痰検診も行っています。そして、COPD検診では、低線量CTに加えスバイロメトリーを行います。定期的な検診で結核も含めた呼吸器の病気を早く見つけて早く治療することで、不自由のない生活を送ることが出来るのです。是非、肺検診に活用いただければと思います。肺検診についての質問がありましたら当院までご連絡ください。



2014年11月22日に行われた第9回国立病院機構和歌山病院市民公開講座の内容を編集したものです。